

ねこみ

猫 養 通 信

第十六号

発行人 東 明雅
発行所 柏市つくしが丘2-2-12東明雅方
Tel. 0471-75-1192

点印のころみ

東 明雅

昔の俳諧師は、連句ならびに発句の巻(句帳)に評点のため押す、各自独特の印形を持っていた。これは和歌・連歌に倣ったもので、最初は墨で印を付け、「合点」「付墨」「批点」とも言われ、「俳諧染糸」(元禄十七年刊)には「添削古法は長・珍重・平、この三の外なし」と書かれている。平点は斜線一筋の引墨、長点は二重引きであり、珍重は批言であるが、平点は一点、長は二点、珍重は一点半であったとも言われる。しかし、その後、点の表現形式も批言の言葉も増加し、やがては、直接文字を書かないで、印刷したもの(点印)を押すようになった。俳諧師・宗匠のことを点者というのも、このような理由によるのである。

この現象は、時代が下るにつれて過熱し有名な其角についてみると、「半面美人」(五十点)、「一日長安花」(十)、「洞庭月」(七)、「越雪」(五)であったというが、宝暦の頃には、五百点・七百点・千点までの点印が用いられたという。

このように、高点のみを競うことが、俳諧の墮落につながったのは当然である。それ故、私は連句の作品を批評するのに、点印またはそれに類したものを使うことはなかった。「季刊連句」四十五号に掲載した歌仙「花の盛り」に対する私の批評はそれまでの私の方法を踏襲したものである。

しかし、その後、A・C・Cで実作した作品に対し、仮りに新しい点印を用いたところ、それらの作品に対する私の評価が一目でよく分かる事に気が付いた。点印と言っても、◎・○・△・×の五つである。◎四点、○三点、△二点、×一点と仮りに決めたが、これはまだ試みの段階にすぎない。

次の例を見て、各位の御意見を伺いたいと思っている。

明雅点 二十韻 初夏や の 巻 添削

○ 初夏やにはかに句座を整えし 整へし

○ 青葉を映す高層の窓

○ 白塗りの遊覧船の行き交ひて

○ 幼稚園児の小さき靴音

○ まろき月バクスバニーも棲みたるか

○ 網のタイツを滋蚊がさす

○ 女房を騙し食らはす毒茸

○ 計画通り政治家となる

○ プラトンのソクラテス像撫ぶるの図

○ BGMの曲はゆるやか

○ 盆地住み静かなる夜の糞酒

○ 糞祭りの用意ととのふ

○ 踏みそこねよろけたふりで抱きついて

○ ホテルのあかり叶ふ正夢

○ ギヤマンの大壺透かす月五更

○ 猷体遺言まだ若き人

○ 銭湯の気功の会に杖を引く

○ 薬めぐり鳩の遊べる

鳥頭

整へし

整へし

整へし

整へし

整へし

整へし

整へし

整へし

整へし

整へし

整へし

整へし

整へし

整へし

整へし

整へし

整へし

協同乳業の小さな広告で、読者から高原を詠んだ俳句を募集している高原牛乳俳句シリーズというものです。

先生や同人達とよく那須や阿蘇や信州といった牛乳の産地の牧場へ吟行に出掛けました。

同行する我々広告会社のスタッフも時折句作りに参加させて頂いておりましたが、ある時、金子先生が、何か聞いたのか「君達広告会社の人達は俳句よりも連句の方が向いておるかも知れないな」とおっしゃいました。

連句と聞いて、ああ、五七五、七七と言葉を連ねていくもの、日頃広告文案を作っている我々にとって、やりやすいかもしれない、と安易に納得してしまつたのでした。

そこで、早速始めてみようということになり、コピーライター仲間が集まり全く我流で五七五、七七の句を延々と作ることを繰り返しておりました。

今から思えば何となくことをやっていたのか、ということになります。でも、何やら神聖な気持ちになり、真面目に一生懸命作り続けておりました。

そうこうするうち、何か本物ではないな、何か違うな、という違和感が仲間の間で漂いはじめました。そして、どうせやるならちゃんとやりたい、真剣に連句のことを勉強してみたい、そのためには、まず、連句を指導して頂く師匠に習うことが絶対、ということになりました。

こうなると、世界の電通です。何が何でも第一人者を見つけてくるというのが当社の社風。情報産業電通にとってはお手ものです。たちまちに、東明雅先生とのコンタクトに成功しました。

で、毎月電通連句部の例会で東先生を呆れさせている次第となつた訳です。

私達電通の連中が連句と出会つたのは思わぬきっかけでした。

かれこれ十年くらいになりますか。当時、私達は仕事の関係で俳句の巨匠金子兜太先生に選句をお願いしておりました。

今でも続いています。朝日新聞と日経新聞に何日かおきに掲載されているグリコ

兜太先生のつぶやき

吉田憲助

(評略)

○ 墨堤の右も左も花万朶

○ 菫弱弁当開くうららかに

○ 銭湯の気功の会に杖を引く

○ 薬めぐり鳩の遊べる

○ ギヤマンの大壺透かす月五更

○ ホテルのあかり叶ふ正夢

○ 踏みそこねよろけたふりで抱きついて

○ 糞祭りの用意ととのふ

○ 盆地住み静かなる夜の糞酒

寺の大
屋根

「鶴籠会」の歩み

松村 あや

山紫水明といわれる岐阜に移り住んで、早十一年になろうとしている。市街地は鮎躍る清流長良川が走り、背後に緑濃き金華山、その頂には小さく岐阜城を望むことが出来る。この雄大な自然の景観は、歴史的背景と相まって、四季折々見飽くことなく私の心の安らぎの場である。今鶴籠のシーズンだが、夕暮には幾十艘の屋形船が舳い、鵜舟の下ってくるのを待つ。篝火が燃え盛り水面に煌くさまは幻想的である。

その鶴籠に因み「鶴籠会」と名付けた私達の連句会も、早いもので二年が経過した。或る会合の席で本屋良子さんに、初めてお目にかかった。時々岐阜で詩人達の連句会があり、私もその末席を汚していたことを、御存じだったそうで、「御一緒に連句をやりたいませんか」とお誘い下さった。何でも見たい、聞きたい、知りたい、行きたい人だが連句の「てにをは」さえ知らず、よくも今まで連句やっていますという顔をしていたと恥じていたので、即座にO・Kした。

翌日から本屋良子さんを先生に、俳人、歌人を誘い、「鶴籠会」が誕生した。第一回目に巻いた半歌仙「絵蠟燭」が良子さんの名捌により、思いがけずも第四回新庄大会の入賞に輝き、幸運なスタートが切れたと感激も一入だった。その時のメンバーは本屋良子、柴田由乃、川治敦子、成瀬貞子さんの五名。良子さんが表彰式に参列出来ないとのこと、代理で由乃さんと新庄へ遊びも兼ねて出かけた。初心者が壇上に立ち面映ゆかったが、忘れられないよい思い出となって幸せだった。

特にご指導を願っている東明雅先生にお目にかかりたいと願っていたので、白い美しい顎髭と優しい眼差しの先生に、親しくお話が出来て満足した。現在も毎月作品をお送りして懇切丁寧なご指導を賜り、感謝申し上げている。

最初に五人で始めた会が今では、船渡文子、沖津秀美、端元涼子、妹尾千草、この五月に入会された大平伍郎さんの黒一点を加え、十名の会員となり、良子さんのお人柄と木目細かい指導により、華陽公民館、月一の勉強会をわいわいがやがやと楽しくやっている。最近はおも交替にやるようにとのことで、良子さんに助けられながらの勉強だ。その成果が昨年も新庄大会で発揮され、沖津秀美さん捌「水鶏鳴く」が優秀作品に選ばれ二年連続の喜びとなった。メンバーは、秀美、良子、敦子、文子、千草さん、私の計六名。

今では連句の虜となり会の日が待たれる。半歌仙「絵蠟燭」 本屋良子 捌

絵蠟燭買ふ出格子や山法師 松村あや

藍ののれんに通ふ涼風 本屋良子

ティールーム無人ピアノを聞くならん 川治敦子

ソファに深くパイプくゆらす 柴田由乃

城郭の肩にかかりし望の月 成瀬貞子

ひとしきり鳴くすいっちょの声 や

蜂の仔に一合で足る越の酒 乃

粹な尼さん連句楽しむ 貞

「猫蓑作品集Ⅳ」を読んで 心に残った「酒」の句

何時しかに酒量増えゆく女記者 志津

炒めこんやく胡麻をまぶして 美保

△同性のお酒にはリアリティーを感じます。酒蔵に下戸の続くは家系なり 和子

大盃を干す美しき花嫁 泰子

△一生にはきららかな瞬間もあるのです。青あらし「土佐鶴」乾すが男ぜよ 隆秀

別れつらさに隠す幃子 幹子

△視覚聴覚嗅覚の全てに刺激的な付合。流星群待ちをり酒は緑色 健悟

眠い子あやす山の端に月 海砂

△やはり男性たちはロマンチックです。他にも楽しいお酒が処々に。心地よく酔わせて頂き、猫蓑連句に感謝です。 (浅賀淑代)

青松葉

不住

作品集Ⅳの自分の文音作品を前三集と比べてみると、自分の付句は連句形式を追うのに精一杯で何か余情に乏しく、われながら上り調子とはとても言えない。またⅣ集の「大寒に」のナオの様な見事な付合いを読み、何とか先輩方を目標にマンネリに陥らないよう精進したい。それには、まず類句を避けなければと思う。勿論出来る範囲内でとなるわけだが、大体、類句であることと自体、広範な勉強なしに判断出来ないことなので、当面、少なくとも自分の句の類句を避けるのを目標にしたい。「浪にちりなし夏の月」を「白菊の塵」に紛らわしとして「青松葉」にした翁の厳しい詩趣開拓の姿勢をあらためて思いだした次第である。 (峯田政志)

花の句に寄せて

猫蓑連の揃い踏み。猫蓑作品集Ⅳが完成。明雅先生の御指摘を愛の鞭として受止めよう。さて花の句は鑑賞も作句も心ときめかせる。左に眩しい花の句を掲げてみる。

○砂糖菓子ほろほろくづれ花吹雪 種蒔く人の影を遠くに

○デル・デス・デム・デン覚えうららかに 花盛り空より笑ふ鬼瓦

子供の頃は花が大好きだった。昭和二十一年中央線阿佐ヶ谷駅から眺めると、焼土の彼方、関東山塊に白々とした花が貼りつく様に咲き満開。花と讃えられ散っていった若者。私は突然花が嫌いになる。虚しさ悲しみの象徴。気分が戻るのに三十年かかった。後世私共の花の句を賞でる人がいたら、まだ平和が続いているのである。 (中田あかり)

平成六年六月八日、俳句文学館に於いて、猫養同人会が開かれました。

当日は丁度東京の梅雨入りの平均日とかで空模様は気掛りでしたが、幸い、雨も落ちずいい都合でした。

出席者は三十一名、会場の都合で朝十時からという早い時間にも拘らず、御遠方からの方もお早々と御出席頂き当番一同感激致しました。

定刻、中川哲さんの司会で総会が始まり、副会長の式田和子さんの御挨拶、明雅先生からも御言葉を頂きました。下鉢清子さんから猫養作品集についての御報告がありました。

その後今年新入会された九人の方の御紹介があり、皆で拍手でお迎えしました。これで総会が終り、五席に分れ歌仙実作に入りしました。お席の名前は季節の花紫陽花に因んで、四葩、七変化、手毬花、等、異名が席名に付けられ風雅なことと皆様に喜んで頂きました。

そうこうするうち、早くもあちこちのお席で「よろしく」と乾杯の声、何処もよいすべり出しのようです。お弁当をあげられ、面白い恋句がついたのか、笑い声も湧き、和やかに進行して参りました。

「御苦労様」「ありがとう」と拍手が起り全席定刻に巻き上り、捌きの方もほっと一息です。順々に披露が行われ、無事閉会となりました。

不慣れな当番で不手際もあつたかと思いますが、皆様の御協力で大過なく会を終えましたことを感謝して報告に代えます。

(上月 淳子 記)

* 以下五歌仙同人会作品

葛蒲田の八つ橋人のあふれけり

水鳥の巢に吹き渡る風

黒ビール陶のジョッキに注ぐらん

小銭足りぬとちよと慌てる

終電車通過月守る山の駅

ギター囲みて夜字子の群

外米にサフランつかみシエフの腕

苦みばしった顔に惚れ惚れ

女好き遺伝法則そのままに

船場道修町今はビル街

クマズミマルチメディアにはびこりて

受けし名刺に探偵の文字

月笑ふ伊辺に自画像描きすすむ

納金毘羅妻は欠さず

のぼせあげPTAで脱毛症

白鳥還るみちのくの空

灌桜夢のごとくに花しだれ

気の合ふ友とかぎろひの中

オボらんこを心ゆくまで漕ぎ上げて

ティータイムにはナタデココなり

行革で予算審議もそっちのけ

四万六千日も終りぬ

口ずさむリールマルレーン映画館

ストリップパーも時に純情

呼吸法相棒がはや産んだ気に

九尺二間に残る虫鳴く

西鶴忌岩波文庫復刻版

宝の市で升を買ふ月

網代打わんざわんざと魚が捕れ

インペーターのまぎれこむ路地

オゲートポール律義に生きて子は遠く

同窓会で南仏の旅

葦原に角笛の音流れゆき

服に合せる春のスカート

花ぶく枝に結びし小短冊

しっぱの丸い仔猫じゃれくる

淑子

久美子

啓子

麻子

達子

明雅

麻

雅

美

麻

美

麻

美

美

美

美

美

美

美

美

美

美

美

美

美

美

美

美

美

美

美

美

美

美

美

街路樹の梢騒ぐや梅雨ささず

初蠅の鳴きそむる頃

ごもく船打ち込む生酢も多めにて

基盤を囲む父と子供ら

山の端をオレンヂに染め望の月

さぐり寄せたる落鏡築

御命講片手拝みに済ませける

ひときは背の高いハンサム

新宿は僕の縄張レコを連れ

雀は通る開かぬ踏切

消費税政治家民の声を無視

闇汁ならば杓子より著

年惜しむ月ほっそりと懸かる軒

野良猫くんのテレパシー飛ぶ

マーフィーの法則何でも当てはまり

小銭切らして買へぬ一合

靖国に五十年目の花吹雪

遠き春雷過ぐる束の間

潮吹の泥の中より吹きあげて

書評の割に売れた我が著書

ピンボール退場処分厳正に

故国に癒へて帰る横綱

甚平の脇のかがりを教へられ

それとはなしに匂ふ湯上り

剃刀を構へる尼の血の透きて

男嫌ひは本心でなし

英仏の海峽むすぶ新列車

「会議は踊る」つれてハミング

月明し水晶玉の卦を読まむ

菊人形のじつと見据える

行く秋の段葎褒貶の渦の中

爺の好物ソース煎餅

みちのくを訪ぬる夢の気儘旅

油彩のごとき青の下萌

古りし花今咲き満ちて寂と立つ

悠々風の糸を伸ばしぬ

澄子

和子

好敏

利子

郁子

志げ子

あかり

郁

和

郁

敏

志

利

志

和

敏

和

敏

志

敏

敏

敏

敏

敏

敏

敏

敏

敏

敏

敏

敏

敏

敏

敏

敏

遠筑波蒼々けふる芒種かな

植田豊かに広げれる里

ギター聴くワインゼリーをふるはせて

ブックエンドをすこし動かす

猫二匹月あるうちは屋根にあり

どんぐり独楽が子の宝物

秋狂言仕立ておろしを身にまとい

地下鉄口のひどい混雑

ダイエットし過ぎて彼はおみそれし

あやしきことを問診の医師

「あれ」は「これ」側近だけに解る「あれ」

立木観音半眼の笑み

月の元踏みしだくなり初水

鴨南蛮に七味たっぷり

浪人の問題集のめくれ癖

相続税はどこも物納

平安宮朱塗りに映ゆる花万葉

春日遅々とわれを過ぎゆく

血が呼びたてて踊るジプシー

出張の筈でありしを住み着きて

けふの暑さに絹の褌

念入りに男の指が洗ふ髪

女帝の嫉妬とぐる巻きたる

揚子江下る筏に豚を乗せ

戦後の記憶綴る新作

アドリブのニュースキャスター流行っ児

嘆こらへて吞ます散薬

黒松の幹に月さす菅林署

邯鄲の鳴くとぎれとぎれに

陣子張り留学生も手伝うて

唯のひとだが御立派な髭

晩酌はほんの一合にてたれり

水滴らせて太る川蜷

城ありし時世の夢を花の咲く

通路の旅も無事に結願

通路の旅も無事に結願

千町

路子

孝子

文子

弘子

治子

孝

文

弘

孝

路

孝

路

孝

路

孝

路

孝

路

孝

路

孝

路

孝

路

孝

路

孝

路

孝

路

孝

路

孝

路

「七変化」

瀧川 雅代 捌

「十裏の雨」

佛淵 健悟 捌

源心「かぎろひて」 下坂 元子 捌

歌仙「御鷹場」

坂本 孝子 捌

七変化彩を深むや百人町
 蜻蛉生まるる庭池の面
 冷房の美術教室子が群れて
 香りも高く淹れし珈琲
 漸くに居待の月の顔を出し
 椋鳥の渡りのよぎる山の端
 黄落のマリア聖堂礎を踏み
 チェーンゆるるうなじほっそり
 助手席の彼女の胸の眩しくて
 違反切符はこれで三枚
 「あれ」だから「あれ」に聞いてと羽田総理
 飼主呼べど横を向く犬
 月冴ゆる塩の道とて影の濃く
 火事見舞には取りあはず酒
 髭面の校長先生情厚し
 衿を正せる清正の像
 禅寺の御衣黄桜花吹雪
 姉と妹陽炎を行く
 夏近し旅のプランを確かめつ
 腕のギブスの取れる日を持ち
 うつつらと埃積もりし製図台
 宇宙飛行士金魚お伴に
 あかあかと夕焼雲に下駄抛る
 屋根神様へ供ふ饅頭
 箒目のあとすがしく若女将
 ミラノより着くあの方の文
 長身でソフトスーツにノーネクタイ
 麻薬密売すれ違ひさま
 そぞろ寒飲み屋横丁月中天
 ドレミファソラシヒよんの実を吹き
 秋の湖舟うかべつつ友憶ふ
 白黒映画画面ちらつく
 ファミコンに夢中の孫は指腫らし
 春一番は知らぬ間に過ぎ
 流鏝馬の馬場のあたりも花の雲
 のどかに時を告げる鐘の音

十裏の雨つれてゆく駿者かな
 夏つばめとぶ破堂の軒
 ギヤマンの瑠璃色美しく飾られて
 BGMに探すCD
 新しきくらしにも慣れ八日月
 自転車漕いで急ぐ夜学子
 やや寒の珈琲香る駅の前
 病抜けして精気戻りぬ
 パソコンをかるやかに打つひとの指
 即座に返す相聞の歌
 赤染の酒呑童子といふ茶碗
 凍て月渡る丹波篠山
 ぼっぺんの四つ身の袖の愛らしく
 小旗をふってマラソンを観る
 マスコミを敵にまはして見得を切り
 贈る角樽熨斗紙をつけ
 爛漫の花に卒寿の杯掲げ
 復活祭のオルガンをひく
 和布刈船なぎたる海に眠るごと
 三泊五日の放浪の旅
 何となく家計簿合っしてしまふ怪
 小豆洗ひの呪文英語で
 おもらしに出る場失ふかくれんぼ
 母の仕置に匂ふ香水
 青髭の妻は七人薄ごろも
 ポンテベッキオほいと唄へる
 彫刻の埃も古りて石の守
 雀色時いつも淋しく
 月の出を待てり詩集ととら猫と
 焼松茸を盛りつけし膳
 せせせらぎの音高くなる若紅葉
 ジャンブルジムで逆上りする
 度忘れを又初めからアカサタナ
 真いっふくふつと輪に吹き
 花明り絵師に届きしくにの文
 蜂の羽音のささやきに似る

かぎろひて流るともなき大河かな
 若菰を分け漕ぎいづる舟
 獨り居に松蟬の声届くらん
 薄茶を点てて打菓子の鉢
 深雪晴友待つ縁に月燈と
 フィッシャーマンの厚地セーター
 フィヨルドの奥に愛の巢ひっそりと
 囃も名も捨て守りたる恋
 微笑仏陀一本で彫りつつけ
 やませ吹くともかかはりもなし
 航空機事故に新聞全頁
 ナナハン駆ける高き爆音
 花万朶人にもまるる段葛
 子の手放れて飛べる風船
 ジェンナーの種痘も今は語りぐさ
 鳩とまりある銅像の上
 相続が争続となる旧家にて
 母系家族の婿の切なさ
 蛍来て闇のムードはなほさらに
 役者買ふのも山の湯の町
 竊出しにめぐり逢ひたる美術商
 馬刀葉椎の実ばらばらと降る
 新走り神に捧げる月の夜
 湖北あめまます串打ちて焼く
 甘え寄る猫抱上げて老いし父
 大棹の音の腹に響ける
 文机に仮名の連綿花の舞ふ
 春の日傘の通る生垣
 平成六年四月二十七日 於 源心庵

御鷹場の趾にやさし竹落葉
 糠蚊ふと立ち消ゆるかそけさ
 備忘録青きインクの匂ふらん
 撮影器材床に積み上げ
 有明の船団率る帰りに来る
 五人兄弟揃ふ新涼
 石蔵に今年の葡萄かもすなり
 ホルン飴すピレネーの嶺
 忍び逢ふ大佐の妻の胸豊か
 寝物語に組閣もらしぬ
 下町の芥を運ぶ夜の川
 風邪ひききエロ月を眺めて
 ホットケーキぱんと返した狐色
 真行草は何にでもあり
 飛車角は抜きでいいよと言って負け
 金精様を片手拝みに
 院道の訪ふ人もなき花盛り
 ひと雨ごとに太る鮎の子
 ナ詩を書いてこもる少年夏近し
 鏡の奥の我に魔が棲む
 アンティーク家具が大好き猫の爪
 かみなり親父ふたつむじで
 年忘れまたひとの靴はいてくる
 女心にぼつと火をつけ
 脇役にひっそり進む別恋
 うしろめたさを流す早風呂
 御社の鷲尾燦然と月照りて
 四輪駆動初瀬に発つ
 薄原けつまずきたるされかうべ
 余生たのしく郷土史を編む
 大ジョッキビールの泡のこまやかに
 アップで映るボクサーの膚
 するすると世界が読める電光板
 寒のもどりか為替相場も
 散る花に鐘を恨みの乱拍子
 誰に目を供へしは夢
 平成六年五月二十日 於 緑華亭

坂本 孝子

平成六年六月一日発行の季刊連句に終刊の辞が載せられました。私は勿論、何う範圍の方々皆突然のことに驚きもし、これからは連句を学んでゆく為の指針を何処に求めたらいいのか、戸惑いを禁じ得ませんでした。けれども立場をかえてみれば、傘寿をお迎えになろうという今日まで惜しみなくご指導下さった先生が、この辺で少しお休みになりたいお気持ちも分かるような気がいたします。お蔭様で私どもが入門した頃に比べれば連句の座もあちこちに開かれるようになりました。どうぞ許される限りこれからも弟子どもを叱咤して下さいますようお願い申しあげます。

さて明雅先生は忙しい現代人の為に二十韻を考案され、またこの四月には二十八句から成る源心という形式を編みだされ、少しでも連句の醍醐味を楽しめるよう心を砕いて来られました。その醍醐味を満喫したい欲張りが拙宅に集まり、年に一度百韻を巻きます。鍛錬会のようにもあり、脳味噌の棚卸のようにもあるその百韻について、私の体験を記して見たいと思います。百韻の構成に関しては連句辞典に詳しく書かれていますのでご参照下さい。

先ず懐紙は四枚となります。起句は勿論当季で、他の三枚の表の折立はそれぞれ異なった季をえらびます。前句（折端）との続き具合は歌仙の場合と同様。月の座は七回（名裏以外）で、秋月四句、春夏冬の月が各一回です。花の座は四回。各折の末尾の長句です。花も春の花が二句、他季の花が二句（正花論なども勉強しておきましょう）。恋の座は基本的には六回でしょう（初表以外）。でもこれは出るにまかせま

しよう。その他の式目・去り嫌い等は歌仙と同様です。

さて百韻という昔は戦勝祈願や何かのお祝い・追善などに大勢で付け回しをしたりする事が多かったそうですが、百韻と言えども一巻の流れに序破急がなければ作品として面白くありません。その為にはやはり捌きが必要で、月・花・恋はみな異なった趣を持たなければなりませんし、笑うところ泣くところ、激しいところ静かなところと、捌は今まで明雅先生からご教示いただいた連句に関する知識の全てと気力・体力を注ぎ頑張らねばなりません。けれどももともとたいへんなのは連衆です。付勝ですから皆が百句詠む気構えで取り組み、中には一回に何枚も短冊を出すときもありまして、一句治定するのに五ノ六分はかかるとして、六〇〇分、延々十時間にも及んで脳味噌を絞り続けるというのは、本当に厳しい作業です。こんな思いをして詠まれた句の大部分は捨てられてしまうのですから、いつか短冊の供養をしたいと思っています。これだけ詠みつくして、もう何も出るものがないかと言え、仮に翌日連句を巻いても、また新しい句が湧いてくるから不思議です。それどころか「百韻を巻いたあとでは歌仙を巻くのは楽なものだ」と感想をもりました方もありました。首尾した後、快い満足感と披露の中に披露をすれば、起句から挙句まで、一句一句の間に繰りひろげられたドラマが甦り、それがきょう一日の出来事とはとても思えない、遙かなる旅であったように感じられるのでした。

この度、明雅先生の傘寿にいささかの賀意を表した百韻が、はからずも季刊連句の最終号に掲載され、感慨ひとしおです。これからは達者なばかりでなく、詩情ゆたかな作品を目指してゆきたいものと思っております。

『猫養作品集V』作品募集要項

猫養作品集も順調に回を重ねて第五集を編むこととなりました。毎号特色ある作品で埋められておりますことは、会員諸氏の研鑽並ならぬものの表れと存じます。第五号は、明雅主宰及び理事の方々との協議の結果、左の要項にて作品募集をいたします。ご協力お願いいたします。

記

◎ 作品応募方法について

- 一、捌一人一篇とする。
- 一、歌仙・二十韻などの形とも重複をしないよう何れか一篇。
- 一、二百字以内のコメントを付けるも可。
- 一、百韻応募の場合、該当連衆は他の応募をご遠慮下さい。
- 一、四百字詰原稿用紙使用
- 一、一巡まではフルネーム記入
- 一、末尾に首尾年月日・会場名・捌住所氏名・電話番号記入のこと。
- 一、締切日 十一月末日 送り先 千二七七 柏市加賀2-12-11 梅田 利子 TEL 0471-72-8119 (下鉢 清子 記)

◇ 猫養発展基金ご協力感謝いたします。

- 一口 内田 素舟
 - 一万 桜井 天留子
 - 三万 四宮会
 - （敬称略）
- ◇ 発展基金随時受けつけております。よろしくお願いします。
- 振替口座00130-550348 猫養同人会

* 連句ときかな *

蝦 蛄

杉江 杉亭

戦前、学生時代の思い出である。当時筆者は荒川区の尾久に下宿していた。下宿のご夫婦とともに筆者と同郷で、魚好きのお二人であった。

とある初夏の夕、食卓の大皿に塩ゆでの蝦蛄が山と積まれていた。各自鉄で先ず頭と爪を切り、次に両脇の殻を少し深目に切り取れば準備完了。おもむろに横から殻をはがし身を取り出して口に運ぶ。旨い。頭を切り取ったとき雌であれば赤褐色の「おかか」と称する卵塊にお目にかかれる。蝦蛄の美味はこの「おかか」にある。蝦蛄の旬を夏としたのはこのためと思われる。

先程切った爪は中から身を押し出して二杯酢につけ、おろし柚子で食べれば酒肴として珍味。満腹の後、腹ごなしに上野「鈴木」の寄席見物に連れ立った。



〔Q〕 花の季についてお尋ねします。季寄せでは花は晩春となっております。入学という言葉は仲春になっており、花の後は使えないことになります。花の季と実際とのギャップはどう考えればよいのでしょうか。 (近藤 守男)

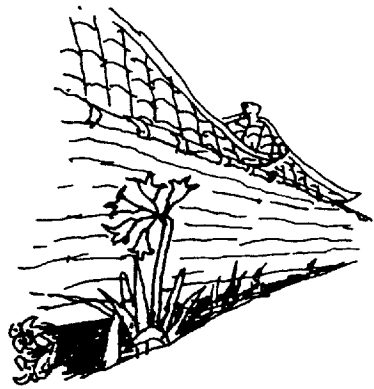
〔A〕 花という語は、普通の季寄せでは晩春の季語となっておりますが、それも使えない用によるもので、たとえば「花を待つ」とか、「初花」というように使えば仲春の句になります。このような場合には、入学とか、新社員、あるいは燕などを付句に使っても、決して季戻りとは言えません。

もともと、季戻りとは、前句の季と付句の季が一見して違和感を感じるような場合を言い、たとえば花の句に、早春・余寒・春一番などを付けるのは、困りますが、前にあげた入学・新社員・燕などの類は、いずれも四月上旬、桜の満開のころと時期的に一致し、決して違和感を感じません。私はこのようなものは、花の後半句に出してもよいと考えます。

人によっては、「花といふは桜の事ながら、すべて春の花を言ふ」という「三冊子」の言を根拠に、花は三春の季語である。だから、その後には何をつけてもよいという人も居ります。たとえば、

倫敦の公園雨の花に逢ひ

などの花は、明らかに桜花ではなく、春咲く花の何かを表現したものでしょう。しかし、この句の後にも早春・余寒・春一番などはおそらく付かないでしょう。「三冊子」が何に拠って、このような説を唱えた



か私は知りませんので、花は三春であるから、その後には何を付けてもよいという考えには、私は賛成しかねます。

要するに、花の句が出たら、その句を仔細に吟味して、それが晩春の句であると判明したら、季戻りのないように、晩春、または三春の句をそれに付けるべきでしょう。ただ、季寄せの分類ももちろん絶対ではありませんので、仲春の季語でも、入学とか新社員・燕とか、四月上旬の季語は、違和感のない限りは付けてよろしいと存じます。違和感があるかどうかの判断は、捌きの重要な役目であり、その判断が連衆の賛同を得られれば、その捌き手は上手と言われ、賛同を得られなければ、その反対の評価を受けます。このようなところが、連句の勉強の一番大切なところで、よく従来の作品例も考慮し、研究して、判断すべきでしょう。

杉内 徒司

角川版『俳文学大辞典』の「高藤馬山人」を書く時、代表句を選ぶのに苦心した。馬山人は平成二年八月一九日に亡くなっているし、生前頂いた数冊の文集、句集には百余句が収録されている。再三読んだ上左の句を選んだ。

麦こがし吾には母の記憶なし

馬山人は広島高校第二回(昭和三年)卒業生だが、その名簿の註記、「改姓」に氣付いたので右の句を選んだのかも知れない。あの頃の都心連句会では、連句実作者馬山人評はひくかったが、俳諧時雨忌の発案者の私としては参加者は多い方がいいので案内状を出したら来てくれた。これが縁で馬山人は野村牛耳指導の義仲寺連句会の常連となった。

京都嵯峨野の正覚寺での第五回俳諧時雨忌(昭和五十年十二月二日)の折、捌きの一人が欠席となったので、馬山人に代りを頼むと、まだ未熟だからと遠慮された。牛耳没後、関口芭蕉庵で例会をするようになって(昭和五十二年一月)からは捌きの一人となつてもらった。

すでに『奥の細道歌仙評釈』『芭蕉連句鑑賞』『桃青俳諧談義』(いづれも筑摩書房刊)の著書を持つ馬山人の捌きは、学究的で連衆を納得させるものがあつた。殊に出句の一直がうまいので、いつしか「なおしの馬山人」と呼ばれるようになった。

馬山人、本名武馬、丙午生れで馬山人と号す。東大國文科を卒業して春陽堂に勤む。柳田國男の指導を受けて雑誌「方言」指導を担当して編集者の道を歩み、戦後法政大

学教授となる。

春陽堂で『万葉集講座』編集の頃、万葉風歌人天田愚庵を知った。愚庵は十五の時明治戊辰の役で行方不明になった父母妹の行方を尋ねた人、清水次郎長伝の『東海遊俠傳』の著者。

馬山人が後年『天田愚庵―自傳と巡礼日記』を上梓(昭和五十九年古川書房)したのは、

「到頭肉親に巡り会へなかつた愚庵に吾が身を重ね合はせたからだ」と高藤先生から下田の宿できましたと、伊東市の郷土史家加藤政志氏から最近伺った。

すると、あの句は馬山人の深奥からの叫びだったのかと思つたりしている。

編集部より

○ ある連句の会に出た時、同じ卓に初心の人がおり、「わからないからとにかくオブザーバーとして座っていたのです」と言い張っていた。が、終り頃になるとその人が一番元氣よく出句するのでおかしかった。様々な個性に様々な出番を提供する連句に、いつもおどろきます。

○ A・C・Cで、又猫蓑の会で、懸命にご指導くださっている秋元正江先生が倒れられて二月半経ちます。ご回復祈念して止みません。

今年の暑さには特別な感があります。皆様ご自愛くださいますよう。

季刊「ねこみ」通信 第十六号
発行者 猫蓑連句会
印刷所 アトリエ・Newo